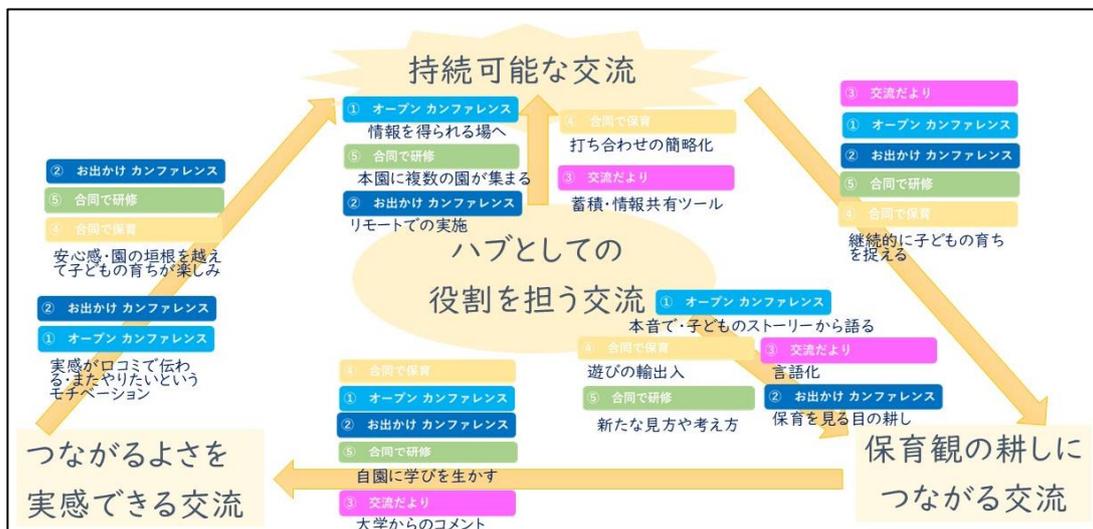


3 今年度の研究を振り返って

(1) 成果と課題

交流の継続的な実践と検討を行ってきたことによって、より多くの園の保育や、その背景にある考えにふれることができた。本園の保育について、他園の保育やその背景にある考えと照らしながら語り合い、保育実践に生かし、また交流する…、このプロセスでは、前項のエピソードで示したように、各保育者が保育の本質にふれるような捉え直しがあり、「つながり」が広がり、深まっている実感を得た。

本園が目指している「つながる保育」のしくみは、「ハブのような役割を担う交流」「保育の捉え直しにつながる交流」「つながるよさを実感できる交流」「持続可能な交流」の4つの要素が連関し合っこそ、真のしくみとして機能するのではないかと考えた（図1）。その全ての視点をもちながら、交流の場をよりよくつくりかえ続けていく、交流での学びを広く共有し続けていくことが、「つながる保育」を行う上で大切なのではないかと捉えた。



(図1) 4つの視点の連関

「つながる保育」で多様な保育にふれることによって、私たちが保育を語る中で生まれた言葉、使ってきた言葉の意味を子どもの姿に照らして考え続けてきた。その問い直しは、保育の中で、数えきれないほど生かされている。子どもを目の前にしたとき、頭の中で、これらの言葉をもとに子どもの楽しさを捉えたり、援助を考えたりしているからである。交流した園でも、同じような問い直しをしてきた手応えや、保育を前向きに更新している実感があったことを、交流後の感想から知ることができた。地域の多くの園が交流をすることによって、地域全体で保育の質にかかわる認識を共有していくことにつながると考える。そこに「つながる保育」の一つの意義があると捉えた。

2年間の交流の中で「つながる保育」をしていくためのしくみが整ってきたといえる。今後、私たちが継続して行ってきた「つながる保育」が、地域に広がっていくことを願っている。「つながる保育」にはどのような価値があり、幼児の育ちにどうつながっていくのか、そして、そのしくみが汎用性の高い、確かなしくみとして機能するためには何が必要なのかを考え続けていきたいと思いを新たにしている。

(2) 職員の振り返り

「つながる保育」2年目の今年、昨年度からの継続的なつながりによって、自分の中の保育観、子ども観が更新されている実感があった。様々な園に訪問し、保育を参観させていた中で、初めて会う目の前の子どもをどうみるか、そしてその子どもの姿をどう意味づけるかは、私にとって、とても難しいことだった。この子は何を思っているのだろうか、何が楽しいのだろうか、どうしたいのだろうか…。考え続けることが、自分の保育観を耕すことにつながっていることは明らかだった。これを繰り返すうち、「こどものせかいをみる」ことの大切さ、難しさを感じるようになった。「こどものせかいをみる」この言葉も交流の中で他園の先生からお聞きした言葉である。この言葉の意味を考え続けた1年だった。多様な方との交流によって、これまで考えが及ばなかったことを考えるきっかけになったり、これまで当たり前だと思っていたことを問い直すきっかけになったりした。交流を通して、気付いたこと、学んだことを今後の保育に生かしていきたい。【3歳クラス担任】

オープンカンファレンスでは、参観によって保育場面を共有した上で様々な視点からの対話ができ、自分の実践に還元される価値があった。他園からの来園者から意見をを得る機会があることは、他者性が活きた振り返りとして機能した。カンファレンスが自園の保育の質にどのように影響したのかは慎重に見ていく必要があるだろう。より高次元な保育実践を目指すためにはカンファレンスのアプローチになんらかの工夫が必要だと考える。他園でのお出かけカンファレンスでは、各職員の関心や捉え方、独自の知的資源が表出する場面があり、より開かれたカンファレンスによって得られるものは、新しい風を自園に入れる上で有効に働いたと感じた。

「ハブ」という概念はトップダウンと異なり、地域の教育資源同士を対等な関係でつなげていくことだと考えている。教育資源をつなぐ際に自園を経由することで付加価値をつけられるとすれば、自園はまさに地域のセンター的な位置づけになる。「保育の質を超えた言説」や、OECD（加えて文部科学省）が注目する Co-Agency などの観点からも、現時点でそのような取り組み（関係作り）ができると、先進的な園として自園は地域の教育のより重要な位置づけになると考えている。【3歳クラス副担任】

園での勤務経験が初めてで、保育について迷うことばかりだったが、多くの園の先生方と、子どもたちの見方、環境構成、援助の仕方やタイミングなど、保育について様々な方向から語り合うことで、少しずつ自分の中で保育に対する視野が広がってきたと感じている。目の前の子どもたちは、どんな思いをもち、何を楽しみとして、何をしようとしているのか、その先にはどのような育ちがみられるだろうか・・・正解のない保育の世界だからこそ、それぞれ異なる園の文化をもった職員が、子どもたちの姿について語り合うことは、価値のあるこ

となのだと思う。

語り合いを通して、自分の中の迷いが少しずつ整理されていく実感があり、本園の保育が大切にしていることについて改めて見つめ直す機会にもなった。これからもたくさんの方々との出会いを大切に、「できる、できない」ではない、子どもの思いを大切にしたい保育を追求していきたい。【4歳クラス担任】

保育に「これで良い」という正解はなく、常に思い悩む。だから常にアップデートして語り合うことで、子どもたちのため、子どもたちにかかわる全ての保育者の大切な学びと気づきになっていく。この語り合うこと、学び合うことこそが、一人の子どもも取り残さない、一人の保育者も取り残さない保育につながっていくと思う。さらに、校種を越えてこの取組が行われていくことで、子どもたちの生涯を通した「ウェルビーイング」にもつながっていくだろう。【4歳クラス副担任】

つながる保育の研究を始めてから、自分の保育はこれでよいのだろうか、と常に考え続けてきた。この答えの出ない問いを前向きに考え続けてこられたのは、園の垣根を越えて語り合える仲間がいたからではないかと振り返っている。保育での迷いを語り合い、明日からの実践に生かし、また語り合う…。そのプロセスは、私の保育をつくる大切な営みの一つになっている。自分の悩みや迷いを語ることで、つまり、自分をひらくことは簡単ではないと考える。自分自身もすぐにできたわけではない。しかし、今こうして自分をひらき、悩みや迷いを語れているのは、同じ地平で保育を考えていける仲間と継続的に語り合うことができているからではないかと思っている。この1年間、つながる保育を継続できたことは、私にとって大きな価値があったと振り返っている。

今後、これまでにつくってきたつながる保育のしくみ、そのしくみの中で紡いできた私たちと子どもたちのストーリーを広く発信していきたい。そして、地域の中で、みんなで保育の質を高め合っていけるようなコミュニティがつくられていくことを願っている。そのためのハブになるような本園でありたい。子どもたちを取り巻く、全ての人が幸せになることを願って。【5歳クラス担任】

日々の保育はいつもめまぐるしく、子どもへの私の援助が良かったのか悪かったのか考える間もなく過ぎてしまう。交流で様々な先生方とゆっくり語り合う時間が新しい考え方や接し方との出会いの場になった。また、今の私のままでできることをやろうという気持ちももてるようになった。そう思う心の中に一滴、二滴と様々な先生方の考えや援助の良いところや、その思いを少しずつ染みこませていくことで、違う援助ができる自分になれたのでは、と思う。【5歳クラス副担任】

今年度は他園と多くつながってきた。他園の先生方と交流をもつ中で、互いに保育の悩みや迷いが同じであることの安心感をもったり、新たな視点に気付いたりすることができたのではないと思う。同時にオープンカンファレンスは、自分たちの園のよさや強みに改めて気付くことができた場でもあった。合同保育ができれば、保育で大切なことがより明確になるのではないと思う。【教育補佐員】

「つながり」の仕組みについては、続けていくことができそうなことと、負荷がかかりそうだとということが分かってきた。職員が代わっても、できる形で継続していきたい。

関心が高まっているのは「カンファレンスの質」と「交流が子どもたちにどう影響しているかを、どう考えるか」ということ。よりよい語り合いを探っていきたい。また、研究協力者の先生からアドバイスをいただいた生態学的システム論について、先日、偶然他の場でも学ぶ機会があった。VUCA時代、子どもたちの健康問題は多様で複層化しており、見えるところだけ見ているのはダメということなのだと思えた。私たちの園の子どもを中心に置き、そのすぐ周りにいる私も、交流においていろいろなことを見たり聞いたり考えたりしてきた。目の前の子どもに直接保育支援を行う人、直接保育支援を行う人が交流した相手、その交流の相手の方はどんな文化や背景をもっているのか、外側から中心に向けた影響について考えるという視点は、「つながる保育」にも当てはまると思う。【養護教諭】